

マルクス主義を暮らしの中に

学長 須藤行彦

マルクス主義にまなぶ

資本主義社会の具体的な「現象から本質」を見抜くことを学ぶには、今日の資本主義社会の矛盾がどこから出てきているのか、どういう風に解決されるのか、この世の中の改革には労働者階級が中心とならなければならないことを自覚し、自らの生きる力にするためには、額に汗して働く労働者の思想「マルクス主義」を学ぶ以外にありません。

資本主義とはどんなに冷酷なものか、合理化とは何か、労働者はなぜ組織的に結集しなければならないのか、を理解する学習の努力が、情勢を正しく把握し、本質を明らかにします。学習会は、続けることが何よりも大切です。ただ知識を得るというだけでなく相互討論を通して参加している仲間が、同志意識を持つようになり、運動の中で協力して活動するようになります。そのように変化・成長して組織的な力に発展します。

私が二十歳の時、向坂逸郎先生からいただいたハガキに「勉強、勉強また勉強、勉強のみが奇跡を生むと、どこかで武者小路実篤さんが書いていました。僕もそう思います。勉強とは本を読むことだけではない。一切の経験を自分の成長にいかすことです。八月にはまたお目にかかりませう。」（昭和42年7月28日）というのがあります。マルクス・レーニンとは言わず、未熟な私に配慮した内容で、「まなぶということ」をご教授されたものと思います。この思いを今も大切にしています。

労働者運動の再建に向けて

戦後、労働運動の中で、最も困難だったのが職場闘争であり、残念ながら最も不十分だったのが職場闘争であったと言われています。1989年11月21日、総評労働運動が解体され「連合」になって33年、「反合理化職場抵抗闘争」は死語になっています。

しかし、拡大する資本主義の矛盾に立ち向かうには、反合理化職場抵抗闘争を組織する以外にないのです。反合理化闘争とは階級的組織づくりであり、職場闘争こそ階級闘争の土台であることを、三池労働者運動は、闘いの中で学び組織してきました。

資本主義体制がつづく限り、労働者に対する搾取強化がつづきます。労働組合の反合理化闘争の終局目標は、資本主義体制の変革への歴史的行為、「賃金制度の廃止！」という革命的なスローガンを旗印に出来るような組織づくりと思想を確立することです。

私たちは、改めてこの問題意識を掘り起こし、階級的労働運動の再構築をはかることに努力することが求められています。

労働大学の果たす役割

2003年11月24日、「労働大学再建集会」で確認し合った、その意義と課題として、①科学的社会主義の追及、理論と実践の統一を追求していく。②職場抵抗闘争を軸と

した、階級的労働運動の追及、反「連合」の立場に立つ態度を明確にし、闘う労働者と共に歩むこと。③労大再建の主体は、友の会運動・大衆学習運動であり、それと一体となつてすすめる。以上3点を再度確認し合うことです。

困難な中でも希望の光が見えたのは、みんなの努力で2004年1月号として『月刊まなぶ』創刊号を誕生させ、今日まで継続・成長し続けていることです。

私たち労働大学の任務は、マルクス・レーニン主義思想をまなび、広めることです。思想闘争に妥協はありません。全国の職場と地域に、大衆学習運動、総学習運動を組織することです。

具体的には、全国各地で取り組まれている大衆学習運動としての「労働大学まなぶ友の会運動」の強化・拡大です。資本に対する怒りを組織する『月刊まなぶ』拡大運動です。

これらの運動を通して培われた、学習と相互討論による人間としての成長、労働者階級としての自覚と誇りです。「大衆学習運動」の担い手づくりです。

中央講座の成功と、本気で『資本論』学習を

労働者の哲学はまず、労働者が労働者であることに誇りをもつというところから出発します。目指すは人間性回復、人間解放のたたかいであり労働者の世界観を持つことです。

その源は、資本に対する怒りです。階級及び階級闘争を自覚することであり、資本主義的常識を打ち破り可能性を高める努力です。

私たちは、しっかりと根を伸ばし、根をはり、裾野を広げ、粘り強く寄り添い、仲間を組織することです。労働者階級の力は、組織的団結力以外にありません。大衆路線の追求です。

そのためにも、中央講座『賃金・価格および利潤』の学習の成功と、各県に『資本論』研究会を本気で立ち上げ組織することです。よく耳にするのは、「指導者がいないから」との声です。誰かに教えてもらうのではなく、どんぐりの学習会から始めようではありませんか。香川の『資本論』研究会では、どんぐりの学習会ですが、第三巻第三篇「利潤率の傾向的低下の法則」（岩波文庫第6分冊）まで来ました。やればできます。

労働大学再建20周年記念集会の成功に向けて

私たちは、労働大学の果たす役割を自覚し、これからもゆるぎない確信をもってたたかいぬく決意です。しかし、『月刊まなぶ』拡大運動は資本に対する怒りを組織する運動だと、意識統一してきましたが、率直に言って不十分だと思います。Kさん、Hさんの貴重な経験と努力に学びたいと思います。改めて内外の五人組運動を再認識し、一步踏み込む勇気と行動で、拡大運動に全力を上げる事が求められています。

当面の目標は、減部傾向を脱する事であり、3000部到達闘争、労大強化基金の拡充を通して近い将来に若い専従者を配置することです。この実現無くして労働大学の展望はありません。近々に事務所移転の大きな問題もありますが、事務局体制の強化を図り継続した拠点として、焦ることなく亀の一步一步の前進を仲間と共に着実にはかることです。

来年の6月11日に第28回全国交流集会に連動して開催される「労働大学再建20周年記念集会」成功に向けて、ホームページの活用と共に、コロナ第8波が来ていますが、お互い健康を第一にしながら「走れば回る風車」です。共に頑張りましょう！